



ウディアレンの映画術

目次

第1章

アイデア The Idea

- 「気が滅入っているんだ」▼1973年2月——18
- 「スリーパー」が終わったことに安堵して▼1974年6月——20
- タイトル未定の脚本▼1987年6月——36
- 映画を一から撮り直して▼1987年11月——43
- もともと陰惨なものひとつ▼2005年4月——56
- 面白い可能性▼2005年9月——85
- 短編映画っていうのは興行的にはうまくいかない▼2006年2月——91

第2章

脚本 Writing It

- 登場人物の進化▼1972年夏——118
- 甲乙つけがたい三つのアイデア▼1974年6月——126
- 有名監督に成長▼1987年6月下旬——133
- 秋に撮る映画の脚本をどうするか▼1988年1月——140

- 影響を受けた本の話▼1988年11月——151
- 旅行中に脚本を書き上げてしまった▼1988年9月——161
- 別のタイトル▼1989年6月——168
- 映画のエンディングは大問題▼2000年1月——171
- すべてに満足していた▼2005年5月——180
- 冷酷で小気味のよい描写▼2005年11月——196
- 幸運にも機械的に仕事のできる脚本家▼2006年2月——221
- 友人を集めて試写会を行い、意見を求めた▼2006年11月——236

第3章 キャスティング、俳優、そして演技について Casting, Actors, and Acting

- 信頼する気心の知れた人間と一緒に仕事を▼1973年2月——246
- 落ち着かない作業▼1987年9月——250
- アメリカとヨーロッパの俳優の違い▼1987年10月——254
- 必ずミア・ファローが登場▼1988年3月——264
- 役柄のすごく広い最高の俳優▼2000年1月——274
- 資金調達▼2005年4月——294
- その役になりきることは常にできる▼2005年5月——301
- 傷の話▼2006年2月——320
- 新しい俳優▼2006年11月——333

第4章

撮影

Shooting, Sets, Locations

- 足踏み状態▼1973年夏——338
- 重大な決断▼1987年9月上旬——346
- 「私の中のもうひとりの私」の製作が始まって二週間▼1987年10月下旬——351
- 「学校の始業式みたいなものだよ」▼1989年10月——361
- 白黒で行くかカラーにするか▼2000年1月——363
- 大いなる美学▼2005年4月——366
- セットを作るときは▼2005年5月——370
- スケジュールも予算も計画どおり▼2005年5月——385
- 様式美が求められた作品▼2005年11月——396
- 悲観的な予想はみんな間違いだ▼2006年2月——410
- 色合いを薄めるつもりはない▼2006年7月——412
- 超一流のカメラマンのひとり▼2006年11月——413

第5章

監督業

Directing

- 生の観客の前で演技と、カメラの前での演技の違い▼1973年5月——418
- 台本は作品を仕上げるためのひとつの道しるべにすぎない▼1987年11月——425
- コメディでは多くのことを単純化する▼1989年2月——429

第6章

編集

Editing

- とにかく運がよかったんだよ▼2005年春——438
- 一緒に脚本を書くアイデア▼2006年2月——460
- 一分ぶんの編集をするにも一時間かかった▼1972年6月——470
- 映写技師しだい▼1973年夏——472
- すべてのカットを注意深くチェック▼1987年11月——475
- 十日間撮り直せば問題が片付く▼1988年1月——487
- 編集といくつかのシーンの撮り直しを行った▼1988年7月——490
- シーンごとの分類表▼1989年2月——492
- 燃やしてしまいたいとは思っていない▼1989年3月——494
- 僕にとって映画は手作りのものだから▼2005年9月——499
- いかにテンポよくするか▼2005年11月——516

第7章

背景音楽

Scoring

- ニューオーリンズ・ジャズ▼1973年10月——520
- 映画監督としての進化について語る▼1989年11月——525
- ひとつは小さな問題、もうひとつは大問題▼1989年3月——530
- 映画の中の音楽の役割▼2006年4月——534

編集と音入れ ▼ 2006年秋 ————— 554

第8章

映画人生 The Career

三十年間に三十本の映画の脚本 ▼ 2000年1月 ————— 560  
ウディにとっては落ち着かない時期だった ▼ 2005年11月 — 2006年11月 ————— 565

ウディ・アレン主要作品年表 ————— 632

謝辞 ————— 634

訳者あとがき ————— 636

本文写真のクレジット ————— 641

索引 ————— 654

装丁・本文設計 ● ————— 西山孝司

編集協力 ● ————— 藤野吉彦・高崎俊夫



第1章

アイデア  
The Idea

ことを考えていたんだけど、僕自身は現実の生活の中でどれほど機械が苦手なことか。ほんとに忍耐力がなくて、どんなに簡単なものでも使いこなせない。混乱するばかりなんだ。僕と親しい人間ならみんな、僕がどれくらいいたくさんの機械を壊してきたか知っているよ。『スリーパー』を書き終えたあとで僕は、そこで繰り返し語られる主題は、先端技術はうまくいかないことだと気づいたんだ。未来の拳銃を撃とうとすれば爆発するし、未来のキッチンも正常に動かない。でも書いている最中にはただ流れて意図せずにテクノロジーを笑いの種にしていただけなんだ。人は僕が意図的に、機械と折り合いが悪い人物を創造していると思うかもしれないけれども、自分では、あとで人に指摘されるまで気づいてなかったんだよ。

EL ● 『スリーパー』がたまたま自伝的だったとすれば、あるいは自分に近いとすれば、『ボギー！俺も男だ』にもそういうところがあるんですか。

WA ● 僕の作品はほとんどが自伝的だよ。まあ、小説のようにすごく強調されたりひねってあったりはするけどね。『ボギー！俺も男だ』の登場人物みたいに、僕も社会的じゃない。外の世界からあんまり刺激は受けないんだ。もつと外へ出て、人と交わったら、ずっといいものが書けると思うんだけど、できないんだよ。

『ボギー！俺も男だ』は、ルイズと僕が別れるときに書いたんだ。リハーサルに入るときに、ちょうど彼女が家から



『ボギー！俺も男だ』で、アラン・フェリクス(ウディ)に勇気を与えるボガート

出ていったところだった。と言っても、ああいうストーリーが現実起きたわけではないけどね。現実には、結婚してる友達が、「あら、だったらいい子がいるわよ」と言ってくれたり、パーティに招いて女の子を紹介してくれたりしたけど、まあぶざまなものだったよ。もともとそういうのって格好がつかないものだし、僕は馬鹿な真似ばかりしているから。でもそのうちに、もう何百万年も恋愛の対象としては考えたこともなかった友達の奥さんたちと一緒にいると自然でリアルだと思えるようになって、むしろ僕のことを、僕が必死に自分を売り込もうとしていた女たちよりもずっといい仲間だと感じていることに気づいたんだ。そのときだよ、あの映画のアイデアを思いついたのは。見ず知らずの他人に必死に自分を売り込もうとしながら、実はそんなことはどうでもよくて、友達といえずごくくつろいでいる。他の人間は僕を神経質で哀れな奴とか超変人とか思っているけど、友達は生身の人間として見てくれるんだよ。

EL ● そういう映画のアイデアを思いついたら、まずアウトラインを決めるんですか、それとも取りあえずメモを取っておく？

WA ● まずアウトラインを書くね。でも、一ページだけ。それがとても辛い。僕自身が特殊であるために、僕が自分の演じるキャラクターを書くのにどれほど苦労することか。だって、僕はプロフェッシ



ボガートがリンダ(ダイアン・キートン)に話すことをアランに教える



『僕のニューヨークライフ』の  
クリスティーナ・リッチ



『スリーパー』の  
ダイアン・キートン



『ハンナとその姉妹』の  
バーバラ・ハーシー



『マッチポイント』の  
スカーレット・ヨハンソン

レットにしても同じさ。

もっとも『タロットカード殺人事件』では、スカーレットは半分おたくみたいな人物を演じたから、僕は彼女をセクシーに見せようとはまったくしなかった。だからこそ彼女は、まだ魅力を内に秘めた大学生のように見えただよ。

EL● 同じような配慮をした女優でほかに思い浮かぶ人はいますか。

WA● 『スリーパー』で顔を緑色に塗ったキートンとか、『ハンナとその姉妹』のバーバラ・ハーシーとかかな。あの映画でも男たちがなぜバーバラに引かれるのか示す必要があったからね。

EL●すでに描いた登場人物をもう一度スクリーンに甦らせたいと思ったことはありますか。

WA●何人かに関しては別のストーリーが書けるかなと思ったことはあるけど、『アニー・ホール2』なんていうのはやりたくないね。それに興味を示した人間は過去にたくさんいたけど。

EL●ご自分ではやりたいと思ったことはない？

WA●ないよ。キートンのほうもね。

EL●『アリス』に室内装飾家として登場したジュリー・カウナーは笑えましたね。

WA●彼女は最高だよ。ジュリーとはもう何度も一緒に仕事をしている。テレビ映画の『ドント・ドリ  
ンク・ザ・ウォーター』では僕の妻の役だった。彼女には失望させられることがない。いつも控えめ  
で、どんな演技ができるか心配しているんだけど、常に目を見張るばかりだよ。

EL●あなたが感心しているほかの俳優の話聞かせてください。以前、ヒュー・グラントのために一  
本書きたいとおっしゃっていましたが、彼から始めましょう。「おいしい生活」では彼をイメージ  
とは違う役に、と言っては言いすぎなら、一連の映画で彼が演じてきた不器用な愛すべき男とは違